

## 原南陽 医案②

一商婦。秋間に至れば大いに喘息し苦しむ。常にも動作自由ならず、廢人なり。予に治を求むるに任せて診するに、巨撻櫓に臂を支えて坐す。数十日動くこと能わず。睡るにも此の形にて、少しく倚側すれば立ちどころに喘悸甚だしく、食は一椀位と言う。仍其の発する時を問うに、背より頸まで板の如くになりて、

顧にも痛む。一医の勸にて八味丸数百目用いて喘は少しくゆるむと言う。葛根湯を与えて、五貼ばかりにて起歩する事を得たり。数を重ねて全く愈ゆ。